



発行所
 一般財団法人
 広島県動員学徒等犠牲者の会
 事務局
 広島市南区比治山本町12-2
 広島県社会福祉会館内
 〒732-0816 電話 (082) 252-0316
 印刷所 Taisei
 デジタルブック
 “衝突の証言”
<http://www.douingakuto.com/>

60回目の原爆死没者追悼式挙行

昭和32年2月に当会が設立され、その年の10月に第1回の慰霊祭が挙行されてから60年目となる原爆死没者追悼式が、8月6日9時から動員学徒慰霊塔前広場で、遺族、来賓、代表校生徒など約300人の参列により厳かに挙行されました。

式 辞

理事長 井上 公夫

本日、ここに、ご遺族の皆様、ご来賓の皆様、そして多数の市民の皆様をお迎えして、第60回目の原爆死没者追悼式を挙行するに当たり、動員学徒・女子挺身隊として出動中被爆し、犠牲となられた七千有余名の英霊に対し、深甚なる哀悼の誠を捧げるものであります。

動員学徒犠牲者に対しての国家補償の措置を求めて、当会が結成されたのは、昭和32年2月、その年の10月に第1回目の戦没学徒合同慰霊祭が、広島市西新町の光道会館で挙行されたのであります。それから60年が経過しようとする中、今年、5月27日、原爆を投

下した米国のオバマ大統領が広島を訪れました。

「71年前、雲一つない明るい朝、空から死が落ちて、世界は変わった」で始まる所感のなかで、核兵器なき世界を目指すべきだと決意表明しました。

歴史の重いドアを開けたオバマ大統領の訪問を、今後どう被爆地が引き継ぐか問われております。

私どもの会では、86名の方の被爆体験記を、文集「慟哭の証言」として発刊するとともに、ホームページで電子ブックとしても読むことができるようにしております。その一部は、世界に発信すべく、英文に翻訳するなど、より多



くの人に被爆体験を知っていたためだけの取組みを行っています。被爆者の高齢化が進む中、戦争体験や平和への思いを次世代の人々が共有し、さらにその思いを世界に広げ、被爆者の悲願である核兵器の廃絶へとつなげていく取組みが重要となって参ります。

本日は、被爆当時、広陵中学校という宇品町にあった、広陵高等学校の生徒さんたちに参列していただいています。

皆さんと同年輩の少年・少女は、「欲しがりません勝つまでは」

と、慣れない手付きながらも、一生懸命ひもじいのも我慢し幼い生命でも国のためになるのだと喜び勇んで学業を捨てて、ひたすら国の使命に殉ずる事に大きな誇りを持って、軍需工場での作業あるいは建物疎開作業などに従事して、多くの生徒は若い生命を散らし、また傷ついたのであります。

あの頃を思い出すのはつらいことです。しかし、皆さん、今、改めてあの日を振り返り、戦没者の方々の犠牲を尊い教訓として深く心に刻み、今後とも「核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現」に向けて、戦争の悲惨さと平和の尊さを末永く後世に語り継いで参りましょう。

終わりにりましたが、本日の式典に際し、ご遺族の皆様並びにご臨席を賜りましたご来賓の皆様には厚くお礼を申し上げますとともに、動員学徒の御霊に永久の安らぎと、ご遺族の皆様を、心からお祈りし、式辞といたします。

平成二十八年八月六日



追悼のことば

広島県知事

湯崎 英彦

本日ここに「第60回原爆死没者追悼式」が執り行われるに当たり県民を代表し、謹んで追悼のことばを申し上げます。

顧みますと、あの忘れることのできない日から、七十一年という歳月が過ぎ去りました。

人類史上初めて使用された原子爆弾は、この慰霊塔の上空で炸裂し一瞬にして広島を焦土と化し、無限の可能性を秘めた動員学徒や女子挺身隊の方々を始めとする多くの尊い生命が失われました。

祖国の発展と安泰を願い、建物疎開などに従事中に亡くなられた余りにも若い犠牲者の方々の無念の思いを推しはかる時、哀惜の念、胸に迫るのを禁じ得ません。

また、最愛の我が子や、肉親を失なわれた御遺族の皆様には、長い間言葉に尽くせない深い悲しみと、多くの困難を乗り越えてこられたところであり、その間の御心労と御努力の程は、察するに余りあります。

私たちは、先の大戦の体験から「あやまちは二度と繰り返しません」と固く決意しました。

しかしながら、戦後生まれの世代が大多数を占める中、戦争体験、被爆体験の風化が懸念され、一方では、今なお、恒久平和と核兵器廃絶への道のりには、険しいものがあります。こうした今こそ、原爆の惨禍を乗り越えた「ひろしま」には、「核兵器のない世界」に向けた強い思いを国際社会と共有し、平和と安定の実現に向けて、努力して行く責任があると考えます。

そのためにも、戦争の悲惨さや、そこに幾多の尊い犠牲があつたことを、次の世代に語り継ぐとともに、国の内外に平和の大切さを強く訴えつづけていかなければなりません。

そして、この二十一世紀を平和で豊かな社会とし、広島に生まれ育ち、住み、働いて良かったと、心から思える広島県を実現していくことを、お誓い申し上げます。

終わりに、犠牲者の方々の御冥福と御遺族の皆様のお多幸を、心からお祈り申し上げます。追悼のことばといたします。

平成二十八年八月六日

広島市長

松井 一實

本日、一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会の主催により、第60回原爆死没者追悼式が執り行われる

に当たり、犠牲者の御霊に対し、謹んで追悼の言葉を捧げます。

71年前の強い日差しが照りつける夏の朝、一発の原子爆弾がこの街を破壊しただけでなく、ひたすら我が国の安泰を願いながら、動員学徒として、また、女子挺身隊員として従事されていた数多くの若く尊い生命も奪い去ったことは、誠に哀惜の念に堪えません。また、最愛なる肉親を亡くされた御遺族におかれましては、今なお、その悲しみはいかばかりかと、拝察申し上げます。

戦後、今日の豊かさや繁栄があるのも、こうした尊い多くの犠牲に負うものであり、私たちは、これを無にする事なく、二度と悲惨な戦争を繰り返さないよう、次の世代に語り継いでいかなければなりません。

本市は、世界平和を進展させる拠点として「ヒロシマ」の役割を強化し、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を目指す「まち」であり続けなければなりません。

現在、被爆者を始め、戦後の復興・成長を支えた市民の高齢化が進む中、戦争体験や平和への思いをしっかりと継承し、一人でも多くの方に核兵器廃絶への思いを共有していただくためにも、より一層、「平和の尊さ」を体感することができ「まち」を築けるように取り組んでまいります。

また、本年、現職の米国大統領と



参列されたご遺族

して初めてとなるオバマ大統領の広島訪問は、「核兵器のない世界」を指す国際的機運を再び盛り上げる極めて重要な歴史的機会となりました。オバマ大統領がその際のスピーチで述べていたように、核兵器を持つている国は恐怖の理論から脱し、核兵器のない世界を目指す勇氣を持たなくてはなりません。

今改めて、あの日を振り返り、一歩一歩世界恒久平和の実現にまい進する決意を新たに、犠牲者の霊を慰めるとともに、平和への深き祈りを捧げて、今後とも戦争の悲惨さと平和の尊さを末永く後世に語り継いでまいります。

終わりに、御霊のとしえに安らかなる御冥福をお祈り申し上げます

とともに、御遺族の皆様のご健勝を
祈念いたしまして、追悼の言葉とさ
せていただきます。

平成二十八年八月六日



式典会場正面

学校法人広陵学園広陵高等学校
生徒代表

松尾 龍 弥
小川 真 優

本日は、第60回広島県動員学徒等
犠牲者の会原爆死没者追悼式に参列
させていただき、あの日のヒロシマ
を偲び、生徒を代表して謹んで追悼
の言葉を申し上げます。

真夏の暑さが続く71年前の今日、

およそ20万人の尊い命が失われまし
た。その中には私たちと同じ、若い
世代の命も多く失われ、動員学徒の
犠牲者は6千人余にも及ぶと聞いて
います。原爆は一瞬にして、あらゆる
命を奪い、街を焼き尽くしました。
さらに、生き残った被爆者の方々も、
その後の人生を大きく歪められ、今
もなお後遺症に苦しんでおられま
す。

私が通学する広陵高校は、当時宇
品の地にあり、校舎は爆心地から約
3キロメートルに位置してしまし
た。戦時下で生徒は、比治山橋など
3箇所建物疎開作業に動員されて
いました。そしてあの日、原爆によ
り校舎は一部倒壊、大部分が半壊し、
また各出勤先で動員中であった生徒
38名、教職員2名の尊い命が奪われ
たのです。

本校では毎年、慰霊式を執り行い、
校内に建立されている慰霊碑に花束
と、全校生徒で作製した折り鶴を手
向け、黙祷しています。また、広島
に原爆を投下したエノラ・ゲイが飛
び立ったテニアン島にある、テニア
ン中等高等学校と2005年に姉妹
校提携を結び、両校の生徒で平和に
ついての考えを深めています。

今年の5月27日、アメリカのオバ
マ大統領が平和記念都市、広島を訪
れ17分間のスピーチを行いました。
核廃絶を呼びかけたプラハ演説で
ノーベル平和賞を受賞したオバマ大

統領が広島を訪問したことは、戦争
による全ての犠牲者への追悼、核廃
絶への祈りを広島から発信したいと
いう思いからだといはれます。

これから世界を担うのは私たち次
の世代です。私たちは地球上から核
兵器をなくし、原爆の悲惨さを次の
世代に語り継いでいかなければなり
ません。私たちが理解しているだけ
では駄目なのです。灯がともってい
る蠟燭に新しい蠟燭を足していくよ
うに、私たちの核廃絶への熱い思い
を、ぜひ次の世代につなげていきたく
いと考えています。

最後に犠牲者の皆様のご冥福をお
祈り申し上げますとともに、御遺族
の皆様のご健勝を祈念いたしまし
て、追悼の言葉とさせていただきます。

平成二十八年八月六日



第60回原爆死没者追悼式

式次第

- 一、開会の辞
- 一、国歌斉唱
- 一、黙祷
- 一、式辞
- 一、来賓追悼の辞（敬称略）
 - 広島県知事 湯崎英彦
 - （代読 健康福祉局社会援護課長 日下仁彦）
 - 広島市長 松井一實
 - （代読 健康福祉局高齢福祉部長 松井勝憲）
- 一、学校代表生徒の追悼の辞
 - 学校法人広陵学園広陵高等学校
 - 生徒代表 松尾龍弥 小川真優
 - 一、献花及び来賓者の披露（敬称略）
 - （衆議院議員）
 - 岸田文雄 平口 洋 河井克行
 - 中川俊直 寺田 稔 亀井静香
 - 小林史明 小島敏文 新谷正義
 - 斉藤鉄夫 大平喜信 岡田克也
 - （参議院議員）
 - 宮澤洋一 柳田 稔 溝手顕正
 - 森本真治 山本博司 谷合正明
 - （広島県議会議員）
 - 砂原克規 宮 政利 東 保幸
 - 宮崎康則 佐々木弘司 河井案里
 - （広島市議会議員）
 - 沖宗正明 宮崎誠克 平野太祐
 - 安達千代美 馬庭恭子 伊藤昭善
 - 海徳祐志 定野和広 米津欣子
 - （広島市遺族会）
 - 副会長 中島百合枝
 - （学校法人広陵学園広陵高等学校）
 - 校長 中土 基
 - 一、閉会の辞

被爆体験証言者 寺前妙子さん 伝承文(3)

被爆体験伝承者…辻 靖司

(3)次に闘病生活を乗り越えられた現在の充実した生活のようすについて、寺前さんは次のように話されます。

寺前さんは爆心地から500m余りのところだったので、皆死ぬようなところから生きて帰ってきた事は大変喜ばしいけど、大怪我をしており長生きは出来ない、よく生きても2〜3年だろう。と言われていたのが、今年(2016年)7月で86歳になります。「先生や友達のお蔭によって、私は生きさせてもらっているのだと思っています。だから、先生や友達の分も、あの時の事を一人でも多くの人に聞いてもらって、いかに戦争が罪悪であったか、非人道的な残酷な原爆投下による原爆被害について、みんなに考えてもらいたい」と思いながらお話をされ、また、色んな本に書いておられます。

それから、寺前さんも適齢期になり結婚をされました。その事を次のように話されます。「奥さんが、たまたま私と年が同じ被爆者でした。そして、3歳になる子供が1歳半の時に子供を置いて亡くなって逝かれました。その時、この子を置いて死にたくない！死にたくない！」と

泣き叫んで死んで逝かれたお話を聞きました。その時考えさせられました。私も普通だったら、結婚をしてこのぐらいの子供がおるだろう、その時に子供を置いて死ななければならぬという事になったら、私はどうなるのだろうか。と一生懸命考えました。その子のお母さんにはなれないけど、面倒だけは見られると思つて結婚をしました。33歳でしたので、子供はもう出来ないと思つていました。色が男の子に恵まれました。色々心配をしておりましたが、奇形児でもなく小頭症でもない健康で元気な男の子でした。そして、その男の子が女の子以上に私の面倒をよく見てくれるので、結婚して本当に良かったな。いつも子供に感謝しながら生きております。」と、闘病生活を乗り越え、幸せな結婚生活と健康で元気な優しい男のお子さんにも恵まれて、現在の充実した生活のお話をさせていただきますました。お話を聞く伝承者の私もすばらしい家族に恵まれた、とても嬉しいお話を聞きし心の和む時間でした。その優しい男の子さんとは2013年9月30日に「金輪島原爆慰霊碑」にご一緒に参拝しました。また、今年2014年8月6日

の「動員学徒慰霊塔」での原爆死没者追悼式でも、ご一緒に活動しました。今後も機会があればご一緒に「金輪島原爆慰霊碑」参拝や「動員学徒慰霊塔」の追悼の活動を一緒にしたいと思つていきます。

(4)次に「恐ろしい放射線後障害」の発症について、お話をします。寺前さんは結婚してから四つのガンを発症されています。最初は子宮体ガン。体ガンという言葉を知らなかったのですが、とにかく近所の八つある産婦人科に行つて全部診てもらったのですが、どの病院も「異常なし。十人十色でこういう事もあるから、奥さん、心配せんでもいいよ！」と言われたので、安心しておられたのです。ところが真つすぐ正面を向いて歩く事が出来なくなり、上を向いてはハアハア言いながら、ちようど金魚がばくばくさせるような状態で上を向いて歩かなければならないので、被爆者診断が出来る大学病院へ行つて診てもらつたら、病院の先生に「何でもここまでほつておいたのか！3期じゃないか！」と、寺前さんは怒られたのです。ガンの症状は、0〜4期の5段階に分類されており、寺前さんの3期は4段階目目進行している最悪の一つ前のとても危険な悪い症状です。とにかく「今晩すぐに入院するように」と言われ急いで大学病院に入院、それから7か月間の長い入院生活をされたので

す。被爆者は、放射線の原因によって色んな病気が起こるので油断も出来ない状態なのです。さらに、肺ガン、甲状腺ガン、乳ガンを患われました。肺ガンは、2014年12月に大学病院で手術をされました。そして頭の中に髄膜腫も出来たのです。これだけは「寺前さん、安心していいでしょう。あなたも高齢者になつとるから、脳に出来た髄膜腫はあまり進行してないので、様子をみよう」という事で定期的に診てもらつておられる状況ですが油断は出来ません。今後も定期的な診察が必要な状況です。

あとは白内障、だんだんと目が見えなくなつていきます。眼科に行つて診てもらつと「まだ大丈夫、限度があつて、その時期に来ないと手術は出来ない！」と言われていたので、

寺前さんの被爆体験証言

4)「恐ろしい放射線後障害」 四つのガンの発症について

- ① 子宮体ガン⇒8つの病院
- ② 肺ガン⇒H26年12月手術
- ③ 甲状腺ガン
- ④ 乳ガン

寺前さんは安心をしてその日を待つておられました。ところがある日、市内で講演があった時、会場へ入る時に足を踏み外して、階段から落ちて気を失って救急車で病院に送られました。その時、先生が「日本の医学は進歩している。目がだいたい悪くなっているが、今からでも遅くないから手術をしましょう！」と言う事になって、白内障の手術をされました。10日間の入院でしたが、治療も終わって、先生が「この眼帯を外します。どのような結果が出るか楽しみだね！」と言われたので、もしも手術の結果が悪かったら、先生はどのような事を言われたいだろうと思っていました。そして、眼帯を外してもらった時に見えたのは、今までは色んな物は黒い色と白い色しか見る事が出来なかったのですが、パツときれいな七色の色が見えたそうです。寺前さんが「先生、見えませんでした。本当にきれいな七つの色が全部見えました！」と言うと、先生は「ああ、それは良かった！ 成功したのだ！」と言われて、本当に嬉しく思われたのです。それまでは、目があまり見えなかったもので、外に出る時はいつも、子供さんが付き添っておられたのですが、その時も「お母さん、成功だったのよ！」と言って、親子で喜んで帰られたそうです。それまでは、修学旅行生からもらった感想文も新聞も読む事が出来なかつ

たのですが、手術をした結果、何でも見えるようになって心から感謝しております。と、4つのガンの闘病生活を乗り越えられたお話をお聞きしました。白内障手術が成功で「パツときれいな七色の色が見えました。」のお言葉には、私も神さまのお導きがあったのだと思ひ感動しました。私もとても嬉しい気持ちになってお聞きした時間でした。

(5) 次に闘病生活を乗り越えられた、その後の人生計画について、のお話をします。

寺前さんは「近距離で被爆したのに、沢山の方々に助けられて今幸せな日々を送っております。とにかく皆さんのお蔭で亡くなつた人達が守って下さっているから視力も良くなつたし、元気にもなつたのではなからうかと、日々一生懸命頑張っております。私は今幸せです。」と話されます。

高校を出る時に、卒業したらどこかに就職をしないといけない。もしかししたら「一生独身で過ごさなければいけない」と思つて、進学をしようと広島女子専門学校を受験しました。1日目は何とかこの学校に入つて、合格して先生になるぞと思つておりましたが、女専の先生が「頑張つて来いよ、待つとるぞ」と言われた時に、首から下が悪いなら良いけど「顔」だから、教壇に立つても常に一日何時間かは生徒の視線を浴びなければなりません。今は大変後悔しておられるようですが、「現在は、修学旅行生の皆さんの前に立つてお話をさせてもらっているのに、あの時は本当にそれが分からぬから、生徒の前に立つて話が出るだろうか、授業が出るだろうかと思つと、この学校に合格したら大変だ！ 私は先生の資格はない！ みんなの前で話が出るかと思ひ、1日目の受験は完全に受けましたが、2日目はだんだんと熱が冷めて自分で出来る事を勉強しようと思つてそれから家で出来る裁縫、洋裁、編み物、手芸に一生懸命になりました。」と、女専の先生の道はあきらめたお話をお聞きしました。

(6) 次に「動員学徒慰霊塔」の建設活動に取り組まれた事について、のお話をします。

「動員学徒に出た者は、何かあった時は国からの命令だったので、救ってもらえるという事でみんな建物疎開にも行つたのです。」と話されまら！ “という事で行つたのに、10年経つても動員学徒に出て行つて命を失つた者、また原爆によつて大変なケロイド姿になって、世間からは「お化けだ！ 鬼だ！」と言われながら、また石をぶつけられながらも、みんな歯を食いしばつて我慢してきたのに救ってもらえない。「これで済むのか！ このままではずっと土に埋

もれてしまう！」という思いで、寺前さんは、被爆者の方たちに声をかけて終戦から12年経つた1957年に動員学徒犠牲者の会を結成し、「動員学徒を救つて下さい！」と県庁に何度もお願いに行きました。このような寺前さんを含めた被爆者の方たちの熱意の活動が、やがては関係者の方々のご協力を得ることになった。よく考えてみれば、本当にあなた達の事は国がされるものと思つていたけど、国もしてもらえない、一つ、県も当たつてみよう」という事になりました。寺前さんは「長い年月の地道な活動でしたが、この活動が実を結び1957年4月1日「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律(原爆医療法)」が施行されました。続いて、1967年7月「動員学徒慰霊塔」の建立に結び付ける活動が出来ました。」と、10年間の苦勞の奔走のお話をいただきました。

私も広島平和記念資料館ピースボランティアに所属して、来館者の方を「動員学徒慰霊塔」へご案内する機会がたびたびあります。ご案内では「動員学徒慰霊塔」に建立委員として刻まれている寺前さんのお名前を示しながら、原爆犠牲者の御霊を慰霊するために遺族や友人らが中心となって活動された、建立の経緯など、寺前さんのご苦勞の足跡も説明をしております。(次号に続きます)

動員学徒で被爆し、 帰宅しない弟を捜して

県立広島工業学校3年生(当時) 縫部 正康

建物疎開作業に動員され被爆した、県立広島工業学校1年生の弟を捜しに行った状況などを手記にし、会に送っていただきました。紙面の都合で一部修正し、掲載します。

原爆投下 弟寿彦 帰宅せず

昭和20年8月6日。当時、弟寿彦は、私と同じ県立広島工業学校生で、1年生であった。

母タキノは、朝早く起きて、私たちの弁当を作ってくれていた。その頃は食べるものがない時代。私たちは母の弁当作りをよく見ていた。

母が弟に「早く学校に行きなさい」と督促。弟は「履く物がない。学校を休む」という。母は「何を言うか、学校へ行きなさい」と叱る。弟はハブテル。母は「私の地下足袋を履いて行け」と言う。弟は、それを履いて、弁当を待つて学校へ向け出発する。(今、私は思う。弟が学校を休んでいれば、死ぬことはなかった。人の運命は、どこで、どうなるか分からないものだ。)

私も、学徒動員で学校の職場へ「軍の物作りの手伝い」に行っていた。

8月6日朝、皆と一緒に広島電鉄の電車に乗り、観音で降りて歩きだ

す。ところが警戒警報発令と公報し

ている。警戒警報発令となると、学生は自宅へ帰ることになっていた。皆「警戒警報だ、帰ろう、帰ろう」という。しかし間もなく「解除」と公報しだした。「どうする。知らん

ふりして帰るか」。しかし「職場へ行こう」という声が多くなり皆職場へと動き出す。(家に帰ることにしていたら、八丁堀付近で被爆死となっていた、と思うとゾーンとする。人の運命とは)

職場に入ると、工場内から「学生は教育室に集まれ」。先生が教育室に来る前、8時15分、ピカーンともすごい光線。少ししてドーンと大きな音、隣の食堂が倒れる。怖い。すぐ机の下へもぐる。私たちの建物は倒れず、少し時間がたって落ち着く。

建物から外へ出ると、広島市中心部は、キノコ雲、「これは何だい」。だんだん大きくなる。私たちは職場へ帰る。私たちの職場は壊れ、天井

からスレートが落ち、床全体へ散らばっている。仕事ができる状況ではない。防空壕へ行く。私たちは何があったか分からない。しばらくすると、「学生は家に帰ってよい」との知らせがある。学生は家路へつく。

そこで見たもの、これが本当の生き地獄。町の中から被爆者は熱を逃れて、水を求めて、ゾロゾロ、皮膚は垂れ下がって、ひどく痛そう。私たちは、これはどうなっているのかと思いながら、家路へと広島中心部へと歩いて行くと、中心部へ近づくと、連れて火災がひどく、火の海。熱い、熱い。広島中心部へは、とても行けそうにない。遠くから「助けて、助けて」の声が聞こえる。でも火災が大きく、熱く、とても行けるものではない。私たちは「コラエテくれ、コラエテくれ」と言いながら、火災を避けるため遠ざかる。

ようやく山陽線鉄道線路へ。今の横川駅付近。どこを通過して帰るか。戸坂峠しかない。道路は火災がひどく通ることはできない。国鉄線路を通るしかない。線路を広島駅方面へ向かって歩く。なんと、この付近の鉄道線路の枕木の垣根が一本一本燃えている。広島市中心部の方を見ると火災がものすごく、ドラム缶が火を吹いて、空に向かって高く上り落ちる。ドンドン広島駅の方へ向いて歩く。川がある。鉄橋を渡るしかない。列車は来そうにない。鉄橋を

渡り、一般道へ降りてしばらく歩くと、広島市中心部から可部方面へ行く道路へ出る。ここでもゾロゾロと多くの人が焼けただれ、着ているものはボロボロ、皮膚を垂らしている者、中には目が飛び出し、痛い痛いと言つて、可部方面に向かってゾロゾロと歩いている。広島駅方面は、火の海、熱い、熱い、とても歩いて行ける状況ではない。

戸坂峠を越えた頃、黒い雨だ。B29が油をまいたか？ 歩きだす。船越峠を歩いて行くと、3人の若い女性、着ているものはボロボロ、私たちが近付くと山へ隠れる。私たちはかまわず家路へと急ぐ。ようやく海田駅に着く。汽車は動いていない。皆と別れ、それぞれ家路へ。私は国道31号線に入る。自動車が走っている。どこの人か知らないが、すぐ乗せてくれた。ようやく家にたどり着く。

家の中を見ると、フスマは全部飛んで、家の中には何も無い。母は「何だかわからん。爆風で全部飛んだよ」と私に言う。母は「正康は生きていたのか」とびっくりして喜んでくれた。

「寿彦(弟)は学校へ行ったので、そのうち帰るだろう」と母は言う。でも帰ってこない。

弟寿彦を探す 原爆の惨状 弁当箱を見つける

8月7日

昨夜、弟の寿彦の帰還を待ったが、帰って来なかった。母から「私は被爆収容所を回って探しに行く。正康は学校の方へ寿彦を探しに行け」と言われた。私はとにかく県工(千田町)に行つて、電気科1年生の行き場所を確認する必要があると思ひ、出発する。

汽車は動いていない。国道31号線へ出る。国道で手を上げトラックに乗せてもらう。向洋付近で降るされる。そこから歩いて広島に行く。比治山の広島中心部側を歩く。なんと、広島中心部は焼け野原で、横川、己斐の方まで焼けて何も無い。見通しがよい。私は御幸橋を渡つて県工へ歩く。

なんと、学校の校舎は全て倒壊、実習場だけが鉄骨だけ残っている。校舎は、どうも原爆の爆風で崩壊したようである。学校で電気科1年生の行き場を問おうにも誰もいない。少し時間がたつて、校長と出会ったので問うと、「分からない」と言われた。しばらくすると、用務員の先生と出会い、質問する。「どうもよく分からないが、県庁(水主町)の方かなあ」とのこと。私は、これを頼りに県庁の方に歩き出す。

広島中心部は焼け野原。見渡す限り建物はない。所どころ鉄骨の建物が見える。被爆熱線で建物が焼け、鉄筋だけが残っている。どんどん中

8月8日

島新町の方へ歩く。そのうち、被爆死者が一人また一人、馬も大きく腫れて死んでいる。中島新町へ近づくと、被爆死者が、どんどん多くなる。数え切れない被爆死者。私は被爆死者を見ることが、だんだん慣れてくる。中島新町では、火災でできた灰が靴の上の方まで埋まる。自分の足も熱い、熱い。非常に歩きにくい。弟寿彦を探すため歩く、歩く。探しながら歩くがサツパリわからぬ。中島新町では、私と同じように、人を探しているのか、2人、3人と出会う。しかし皆、無言のまま。中島新町では被爆死者が特に多く、数えることはできない。

本川橋のたもとの川へ降りる石段(ガンギ)には、数え切れない多くの被爆死者が、皆、体は腫れて、腫れて、頭の髪も焼けて、着ているもの、身につけているものは一つもない。男か女かも区別がつかない。弟がどれか分からない。あきらめかけていた。すると、なんと、弁当箱が集められていた。運良く、弟の弁当箱があった。絶対、弟はこの付近にいると思った。でも、どうしても弟を見つけない。朝、母から方なく、そこを後にして家に帰る。母に報告。翌日、8月8日に皆で弟の弁当箱があった所へ行つて探すこととした。

8月8日

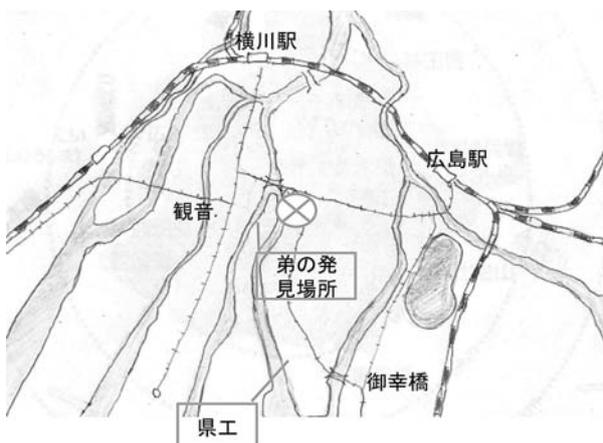
昨日、弟の弁当箱を見つけたところへ、父母とともに行くことにした。弟が見つかったら乗せて帰るため三輪車(自転車)を持って出発した。

広島市中島本町の本川橋へ行く。数えきれない多くの人が被爆死している。正に死屍累々、父母は驚いて言葉も出ない。私は弟がいると思われる本川橋の横の川へ降りる。石段(ガンギ)へ父母を案内する。

ここでは、兵隊さんがトビグチでガンギから被爆死した死人を、上に上げ火葬にしていた。川へ降りるガンギで弟を探していると、もう少しで兵隊さんがトビグチで弟をかけるところで、母が「寿彦がいた」と父に報告し、喜んでいた。兵隊さんに「少し待ってほしい」とお願いする。了解を得た。

しかし、どう見ても弟寿彦と思えない。顔、体も大火傷、体は大きく腫れて、男か女かも区別がつかない。物を見て男とはわかった。しかし、まだ弟と思えない。朝、母から借りて履いた地下足袋もない。しかし母は「寿彦だ」と言う。

私と父とで、ガンギから上に上げる。そうすると、なんと弟の曲がった膝の内側にゲートルの切れ端がわずかに残っていた。身に付けているもので、残っているのはこれだ



け。残っていたゲートルの切れ端に「縫部寿」だけが読める。弟に間違いない。私は涙が出た。

父は、兵隊さんが他の被爆死者を、次から次へと火葬している状況だから(弟を三輪車に乗せて帰っても、火葬にするのも大変)、寿彦の火葬もお願いしようと言いだし、兵隊さんに話したら了解された。また、火葬も弟を他と離して単独で頼んだら、これも了解された。

火葬が済むと、兵隊さんに厚くお礼を申し上げ、遺骨を3人で持ち帰った。弟は3日目によく帰宅した。

おりづるタワー 見学記

今年の10月6日に、慰霊塔付近を清掃し西向寺で読経後、会員15名で、今年お目見えした”おりづるタワー”を見学しました。



おりづるタワーは、原爆ドームの東側に隣接という好立地にあるオシャレなビルです。1階には、広島県の銘品やお土産などを販売する物産館とオープンカフェがあります。

まず、1階からエレベーターで、R階の吹き抜けでウッドデッキの屋上展望台”ひろしまの丘”に上がりましたが、この展望ス



ペースに足を踏み入れた途端、今まで見たことのない景色に、思わず「ウワー！ 素晴らしい！ きれいな！」と歓声が上がりました。天井も床も材木が使用され、空間は壁がなく、あちこちに大きな丸太が使われているという今までみたことがない作りでした。

広島市内を囲む西部・北部の山並み、タワーを取り囲むように立っている無数のビル群、そして、眼下には、原爆ドーム、平和公園、旧市民球場跡、広島城と、ここでしか見られない広島らしい街並みが一望できました。

原爆投下直後の焦土から70年余で、川と緑豊かな都会へと、よくぞ発展できたものと、深く感じ入った会員の方もおられたようです。

R階から1階まで、スパイラルスロープ”散歩道”を、タワー東側の展望を楽しみながら、ゆるりと歩いて降りることが出来ます。

おりづるタワーへの入場料は、大人1人1,700円と高額ですが、本年中は、75歳以上の方、被爆者健康手帳をお持ちの方及び未就学児童”は無料となっています。未体験の会員におかれましては、天気の良い日を選んで、タワーに上って、美しい広島街並みをゆっくり楽しんではいかがでしょうか。

【寺前妙子・本地正治】

供養塔前に水入れの寄贈

今年11月7日、「動員学徒」と彫られた円形の石製の水入れを呉市で石材店を営む新田弘志様から寄贈いただきました。「水、水」と言いながら亡くなった被爆者をしのび作製されたそうです。動員学徒と同年代の修学旅行の生徒さんにも水入れに水をお供えしてもらい、平和を願って手を合わせていただければとお話しされていました。



ご寄付お礼

平成28年5月から平成28年10月までに、次の皆様から貴重なご寄付をいただきました。ご厚志、誠にありがとうございました。

- 桑原 キヨ子 様
- 志水 清 様
- 宇葉 宗人 様
- 鳥羽 孝明 様
- 保田 禮二 様
- 谷増 喜久雄 様
- 丸谷 照子 様
- 松尾 律子 様
- 向井 宏子 様
- 匿名 様

ご寄付いただく際には、左記の口座へお振り込みください。

郵便局 振替口座
0130001618858
一般財団法人
広島県動員学徒等犠牲者の会

あとがき

平成28年は、なんとといっても我ら市民球団カープの年でしたね。25年ぶりのリーグ優勝V7、新井の2000本安打・2000本塁打、黒田の日本通算200勝、神つてる男鈴木木の3試合連続決勝アーチ、11月5日のリーグ優勝V7記念パレードと優勝報告会、と枚挙にいとまのない歓喜のエピソードに感動、感謝、感涙の連続で、大きな希望と元氣をもらいました。

そして、締めくくりは、引退会見で「カープ永久欠番背番号15は、僕個人というよりも、みなさんの背番号かなと思います。」と名言を残した男気黒田の、優勝報告会の引退セレモニーの最後に、20年間力投したピッチャーマウンドに一人ひざまずき、涙を何度か拭いながら、敬意と感謝を評した姿に、最後の大感涙でしたね。

カープはシーズンオフに入りました。私たちも来春を楽しみに、元気に応援できる鋭気を養うことにしましょう。
(本地)